「ヘンゼルとグレーテル」の魔女は女? 男?

山本　まり子

「ヘンゼルとグレーテル」の魔女は女か男か，と言ってもグリムのメルヒェンのことではない。E・フンパーディンクのオペラ《ヘンゼルとグレーテル》の魔女の話だ。魔女（Hexe）は女に違いないのだが，オペラ「ヘングレ」（音楽界では何かと略称が使われる）では楽譜の指定どおりにメゾソプラノが演じるのか，それともテノールが扮装するのか，配役が一つの焦点となる。1893年に完成したこのオペラでは，手伝いをサボった罰に母親から森へ苺摘みに出された二人が，お菓子の家の魔女をやっつけ，レープクーヘンにされていた大勢の子どもたちとともにハッピーエンドを迎える物語に変更されているが，とりわけ第3幕における魔女の活躍は圧巻である。魔女自身が「ロジーナ」と名乗り，箒に乗って歌い演じるシーンでは，しばしば客席から拍手と歓声が沸き上がる。その魔女役を，今日の多くのオペラ公演では男性歌手が担う。

音楽学を専門とする私がこのオペラを生で観たのは，音大の声楽科に入学する前のことだった。わが国では，現在でも「日本語訳詞＋ピアノ伴奏」による小規模な公演が多いが，その日もこのパターン。メゾソプラノの魔女を含む歌手陣は豪華だったが，音響の貧弱さに物足りなさを覚え，チケットのノルマを果たすために高校の友人を連れて来たことを気恥ずかしく感じた記憶がある。

「ヘングレ」に再会したのは，DAAD奨学生としてハンブルク大学音楽学研究所に留学していた1992年のことである。ハノーファーで奨学生の集会があった11月のある晩，せっかくの機会だからとオペラ劇場に足を運んだ。ホルンのアンサンブルで始まる深い森の響きにドイツを感じ，ヴァーグナー張りのオーケストレーションの醍醐味を味わうことができたが，何より驚いたのは，テノールが扮する空飛ぶ魔女（実際に宙を飛んだのは人形）だった。その日から，私の「ヘングレ」通いは始まった。“地元”ハンブルクでは，92–93年シーズンに9回の「ヘングレ」公演があり，72年以来（現在でも）使われているファンタジー溢れる美しい舞台に，テノール3名がトリプルキャストで臨んだ。例のシーンは，本人がロープに吊るされて宙を舞うもの。ミュンヘン・ゲルトナープラッツ劇場の「ヘングレ」にも通った。数学者の夫が，フンボルト財団の奨学金を得てミュンヘン工科大学に滞在していたため，自宅があったのが幸いした。また，研究滞在したロンドンでは，イングリッシュ・ナショナル・オペラ（ENO）の英語公演を鑑賞した。そこでは，メゾソプラノが魔女と母親の一人二役を演じた。女性の善と悪の二面性を表現するためだ。

仕事と家庭の合間を縫って，季節性の強いドイツの「ヘングレ」を観るのは容易なことではない。やっとの思いで決行したのが，2008年暮れの「ヘングレ」旅行。ドレスデン，ライプツィヒ，ハノーファー，ハンブルク（1日2回公演），ベルリン（ドイチェ・オーパー，1日2回公演）の5都市計7回の「ヘングレ」公演を堪能した。魔女がメゾソプラノだったのは，2006年新演出のゼンパーオーパーのみ。ポップなイメージで，真っ赤なドレスに赤毛の魔女は，“ILSENSTEIN”と甲羅に書かれた亀に座る。ハノーファーの演出も新しくなっていて，女優が魔女を自由奔放に演じていた。それと対極的なテノールの魔女が登場したのは，ベルリンとライプツィヒだ。客席の子どもたちも思わず引いてしまうほど，容貌も演技も恐ろしげだった。それから半年後，旅行の余韻も覚めやらぬ2009年7月，日本でも小澤征爾が主宰する音楽塾プロジェクトが「ヘングレ」を取り上げ，国内で世界の一流歌手による原語上演を楽しめた。ヴァーグナーの「指環」のミーメ歌いとして名高いG・クラークが魔女役だったが，張りのある声とユーモアに満ちた演技で観客を魅了した。

さて，標題の問いに立ち返ろう。先行研究によれば，作曲者自身はテノールを充てることを強硬に拒否したという。しかし，今日では演出家と指揮者の考え方次第だ。個人的な好みを言えば，断然テノールがいい。O・スイトナー指揮のCDでは，名テノールP・シュライヤーが魔女を歌う。普段耳にする彼の端正な歌声は，とんでもない魔女の声へと変貌する。私が惹かれるのは，シュライヤーのそうしたイメージ・ギャップなのである。舞台上の魔女も同様だ。視野に飛び込む老婆の風貌と，耳に届く男性の歌声は，頭の中で快い混乱を引き起こす。この混乱こそ，非日常的な異界の存在を表現する仕掛けなのだ。

最後におまけを一つ。日本の「ヘングレ」初演は，1913（大正2）年，《夜の森》という題名で行われた。そこでは，なんと魔女の場面がカットされ，お菓子の家も登場しなかった。日本にも魔女をレパートリーとする男性歌手が多い現状を考えると，日本の洋楽受容のスピードがいかに速かったかがわかる。

（やまもと まりこ／聖徳大学音楽学部教授）